BURST CITY
For Revolutionary Resistance
1993.11.7 No.7
A.R.P

ARP
P.O.BOX57
SAKYO KYOTO
〒606 JAPAN

社会内務労働省庁舎ビルを爆破

労働監督局＝移民狩り機関へのＲＡＲＡの攻撃

(革命的反人種差別行動)

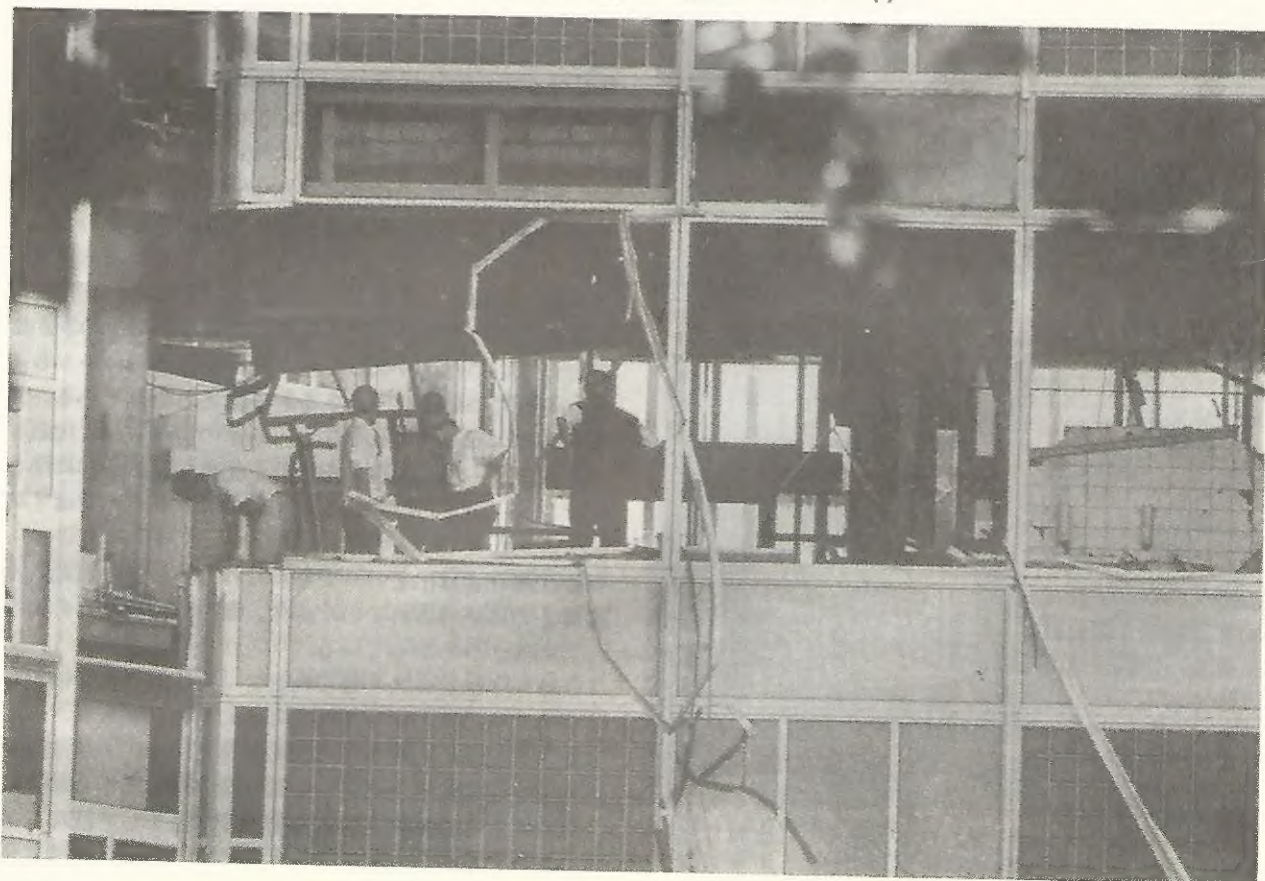
ハーグ 〈オランダ〉

ＲＡＲＡ（革命的反人種差別行動）は'70年代後半頃に登場し、当初は南アフリカのアパルトヘイト政策への反対闘争を課題に南アフリカと交易のあるオランダ資本や企業の関連施設などを狙った連続爆弾闘争を展開していた。（南アフリカに居住する白人の大部分は「アフリカーナー」と呼ばれ、その殆どはオランダからの「入植民」である。このため現在も多くのオランダ資本が南アフリカと深く結びついており、とりわけヨーロッパ最大級の石油資本、シェル石油はその象徴的企業である。）

'80年代に入りＲＡＲＡは活動を「一時休止」していたが、'90年代になってヨーロッパで極右が台頭し、人種排外主義が拡大するなか、武装闘争を再開した。

移民、難民問題は左翼が取り組まねばならない課題であったが、社民路線に流れたオランダ左翼勢力は「人種差別はやめよう！ともに仲良く！」と並べたてる一方、「失業の増加、深刻化する社会問題の原因の一部は、とめどなく流入する移民、難民にもある」などと、資本や権力による排外主義の論理にからめとられていった。

オランダ政府はＥＣシェンゲン合意ガイドラインにもとづく国境政策により、「第三世界」からの外国人流入を厳しく制限、同時に国内に「不法滞留」する外国人の摘発を強化した。アムステルダム・スキポール空港からは毎週数百人もの難民認定を却下された亡命申請者、違

（10ページへつづく）

RARA 声明

6月30日～7月1日にかけての深夜、我々は社会内務労働省庁舎ビル4階フロアに爆破装置をセットし、炸裂させた。この攻撃を敢行するにあたっては、事前に重ねて警告を与えてきた。今回の爆破攻撃の標的は、同階に事務所をおく労働監督局／ＤＩＡである。

この労働監督局は「違法移民」狩りに手を染める権力機関にあって、重要な役割を担う部局として機能している。2日に一度の割合で「違法移民」の働く職場が、地元司法当局と連携した労働監督局の急襲、摘発攻撃をうけているのだ。数年のうちにこの部局は2倍の規模に拡大、強化される予定となっている。すなわち、いっそう強化された摘発攻撃をもって、さらなる犠牲者、さらなる恐怖を生みださんとしているのだ。

人間狩りをおこなう者に対して、自分が標的として狙われるのはどんな気持ちか、具体的なカタチで味あわすべく、我々は今回の行動に決起した。

すでに我々は報道機関に対し、短い声明を発表したが本日、この声明を通じ問題をより一層明確にさせておこう。

「謹厳であること、だが慈悲深く…」

「違法滞在」に関する議論は、突如として再び公の場で語られるようになった。楽観論者であれば、これはボルケンステイン（ＶＶＤ／自由党議長）右派勢力を封じ込めるためロッテンベルグとコストが昨年春におこなった「慈悲深い」決定への激しい反応として捉えるだろう。この反応は事実、激しかったと言えるものではあった。

「不幸にも事がうまく運ばなかったのは、事態打開策の決定に躊躇していたからだ…」とＰｖｄＡ（労働者党＝オランダ連立与党／社民勢力）首脳陣は公に語っている。残念ながら問題はそんなことなどではなかったのだ。政策は一貫して強固かつヨーロッパ規模でなされており会議の場や、官僚による会合で決められた設計図にしたがって進められた。ここで言う政策 — すなわちそれはいわゆる「民主主義のルール」からさえほど遠いものなのである。

人種差別に反対してキャンドル・ライトに灯をともしての行進、「デモ」などは多くの人々が現在起こっている情況を座視してはいられないと考え始めたことで若干の希望であったかもしれない。だが政治家はこれを自らの図式に組み込み、「行進」に参加した人々の数は多かったと認識した一方、これらの人々はオランダを支配する体制への垣根は越えはしないだろう、とも確認できたようである。だからこそ政治家らは今までやってきたことを繰り返して実行することができたし、むしろ以前にもまして容易にコトを進めれるようになったとも言えよう。違法滞在者に対して、何かあるごとに憎しみを煽りたてるキャンペーンが一度たりとも止んだことはなかったわけだが、とりわけ現在これは政治路線として具体的

な形で現出しつつある。政治路線とはすなわち、違法に滞在している者には厳しい措置を講じ、これにはヒューマニズムなど必要ないとする専制支配政策によって導きだされたものである。「謹厳であること、だが慈悲深く…」コストはゼーファルキング委員会に具体的に、諮問という方法を通じて、違法滞在者がここオランダで生活するのを不可能にするための工作をおこなってきた。

トーンは多少違えども「違法滞在者は問題である。」と右翼から左翼にいたるまで口にしている。これら違法滞在者は集中して浴びせられる告発、批判に何ら反撃する術を持ってはいなかった。人間だけでなく、とにかく外国のモノというモノすべてに疑いの目がむけられていった。

「あなたの財布は狙われています。いつ盗まれるかわかりませんよ」 — 民衆を煽りたてるのには、このフレーズだけで充分であった。「1100人ものトルコ人が同じ住所で住民登録している事実を警察が見破った。功績に値する。」 — 市長ペペールは語った。「陸路、満員バスで多くの人間がこの地に流入している。富をかき集めて、トルコに持ち帰るためである。」

「街頭で麻薬を売りさばくガーナからの 15000人にものぼる違法滞在者を即刻取り締まろう。警察権力のいっそうの強化を！」こう主張するアムステルダム市長はペペールの同僚であったようだ。

これらの事実を裏づける証拠があるのかないのかが問題ではないのだ。マスコミはこの「市長の弁」をタレ流し、それについてコメントを若干添えるのみである。ニュースはニュースでしかない。新聞の17ページに掲載された記事 — 数週間後にその訂正記事が、わずかに小さくポツンと載るだけである。報道のガイドラインはすでにできあがっているのだ。

「違法滞在者は出ていってもらはねば…」欺かれた人々の考え方は誘導されていく。今、嵐の前の静けさのような雰囲気がひろがっている。

ナヴァイン、コストはこれまで「違法滞在者」に対して充分すぎるほど浴びせ続けてきた汚名、雑言を、さらにトドメと言わんばかりに加えてきている。「違法滞在者が家を手にするまえに、本国へ送り返してやらねばならない。」これが、実際に権力機関に従事し、政策を推進している者が言っていることなのだ。方向は明確に決

まっているようだ。あとは今まで同様、いやそれ以上に「人間狩り」をすすめるのみである。国家政治の舞台裏を覗き見た者は疑問を抱くことだろう。これら違法に滞在している人々を蔑み、侮辱する思考はいったい何に由来しているのか。

「ゲスト・ワーカー（招かれた労働者）」から「経済難民」へ

「違法」とは政治用語による定義以外のなにものでもない。60年代〜70年代にかけて、企業は地中海周辺からの労働者を雇用していた。当時「自然発生的移民」と呼ばれた数千万もの人々が仕事を見つけるのは困難なことではなかった。ただ彼らが得た仕事とは「きつく、きたなく、きけんな」仕事であり、ゆえに慢性的に労働者の不足していた職場であった。リンブルグの炭鉱、ロッテルダムのオイル・タンカー、トイレの清掃、すべて共通して言えることは、これらの職場は「ゲスト・ワーカー」として招かれた労働者の安い労働力によって支えられていたということである。情況次第でいかようにも変化する政治政策の下「ゲスト」として招かれたかれらにはゲストらしからぬ状況におかれていた。これは実にシンプルな問題であった。

多くの労働者は、経済的理由からやって来ている。「ゲスト・ワーカー」の受け入れは、オランダの経済成長にとって必要不可欠のものであった。急速な成長を遂げていた一連の各産業は、労働力不足に悩まされ、自国内の国民では賄いきれなかったのである。このプロセスは「寛容性」や「歓待」などとはまったく無縁のものであった。こういった状況が長続きしなかったことは当然の結果であり、大した驚きではない。70年代以来このかた、経済の退潮と失業者の増加という状況のなか、再雇用、再就職のプロセスはまったく機能せず、ストップしている。これは次の信念に基づいて意図されたものだからだ。「オランダは移民の国などではない。」

政治、司法システムの御都合主義により「自然発生的」な移民が「非合法」な移民とされていった。

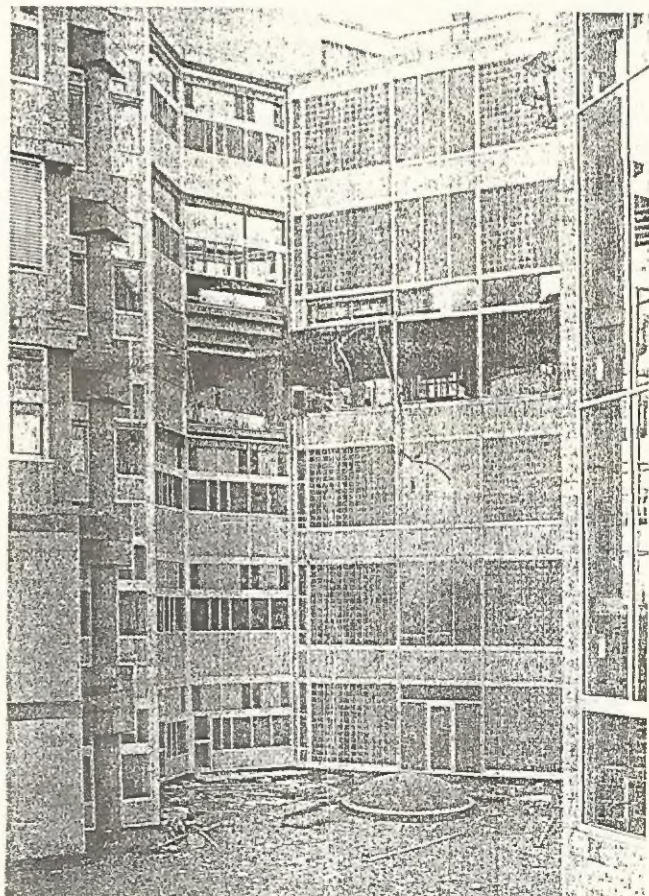
「違法滞在者」の問題は、そもそも国家政策の結果としてあるのだ。移民として暮らす者自体が問題ではなかった。流入移民の定義は、この国の司法カテゴリーの変化によってもたらされたことなどではなく、富める北と貧しき南でいっそう拡大する経済格差によるものなのだ。「違法滞在者はまず人間であるのだ」というのを忘れてはならない。未来とわずかの幸福を求めてトルコ、モロッコ、ガーナの我が家を捨ててきた人々、この富める西という地に安住を求めて絶望からやっとの思いで逃れてきた人々たちなのである。だが彼らは成功しなかった。望まれた存在ではなかったからだ。「富める西に行こう」とする彼らの決意は、この地であっけなく蹴りとばされた。絶望が逃げねばならなかった理由ではない。経済的な理由、その緊急性に追い込まれ、そうせざるをえなかったのだ。違法滞在者にとって後戻りする道はもうないのだ。「絶望下の安全」よりも、「違法滞在下の危険」を選択せねばならなかったのである。そして生きるすべは、ここにしかないのだ。

60年代に形成された労働市場、社会における差別は今日もなお、存在し続けている。つまりそれは「ゲスト・ワーカー」（すなわち低賃金、単純かつ危険な労働）の仕事が一時的に必要とされたのではなく、構造的に常に必要とされシステムに組み込まれているからなのだ。

さらなる経済発展が「富と平等の分配」をもたらしつつ、労働をより合意しうるものへと導くなどというのはまったくの幻想にすぎない。ゲスト・ワーカーらは外部から見えないようにオリのような宿舎に閉じ込められている。いつ放火され、焼き討ちされるかも知れないという現実に耐えつつ、暮らしている。

違法滞在者のほとんどは、社会の最底辺におかれている。彼らの非合法労働によって、オランダ経済の重要な部分が支えられ、機能しているのだ。

雇用側は違法ゆえに、彼ら労働者を低賃金で雇うことができるのである。これら違法就労の労働者を摘発し、本国に強制送還してしまうとどうなるのか。とりわけ食堂、レストラン、温室、清掃などの労働現場で労働力が不足することは周知のことだ。

抑圧、搾取、屈辱は国家や政治家、あるいは企業が違法と規定する根本原理である。上にあげた人間の数とはアヤックス対フェーエノールド戦のサッカー試合でスタジアムを埋めつくす観客よりも少ない。たったこれだけの人間がオランダに恐怖をもたらしているのである。

ＲＡＲＡの攻撃で吹き飛んだ4階フロア。スプリンクラーが作動して全館水びたしとなり、機能は完全にマヒ。

「問題をこちらでコントロールしておくために…」

違法滞在者の問題が手におえなくなって深刻化したとき、政治が介入してくる。そしてこれは、とりわけ来たるヨーロッパＥＣ統合へ向け、緊急に準備する必要が生じてきている現在について当てはまろう。この点から、ビネンホフ（オランダ議会）で繰りひろげられるノン・ストップのホラー映画に何らかの分析がなされねばならないであろう。つまりこの国において国家政策の基本原理となっているおろかな思考と人種排外主義についての分析である。

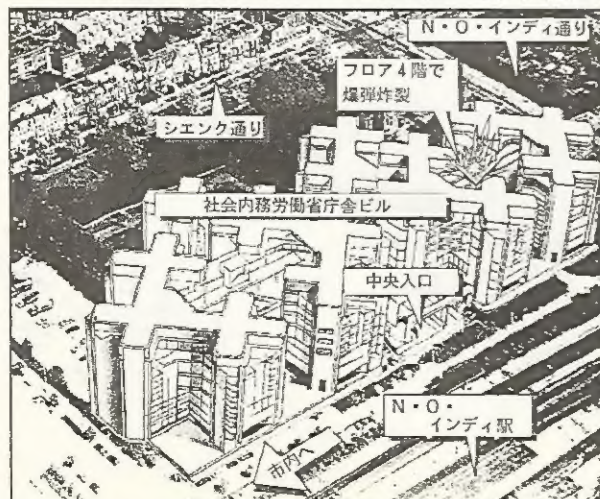
ヨーロッパにおける経済、社会基盤の再構築のプロセスにあって、政治は必ずしも政治家たちの望むようには進められてはいかない。ヨーロッパ市民であることの幸福感は薄れつつある。その首都ヨーロッパの輪郭がはっきりと浮かび上がってきた。まずもって統一ヨーロッパは驚くべき姿として現出するであろう。資本のたわわに実った木をほんの少しばかりゆすって、落ちた果実を拾い、皆に少しだけ分け与えるという姿がそこにある。

政治的、社会的変化へのさらなる恐怖と不満が登場してくるであろう。これらはすべて政治と経済システムが間違って機能している状況下、危機の兆候として現れてきている。人種排外主義は「よそ者」「違法滞在者」あるいは「外国人」といった新たな概念を社会内に構築しつつある。このような社会状況にあってコストは鉄パイプを上着の下に忍ばせながら、次のように公言した。

「問題をこちらでコントロールしておくために、これらの人間は追いださねば…。」人種差別は、西側の人間がすべてのものごとの尺度と考え、植民地支配政策の歴史を一切疑ったことのないこのオランダという畑ですくすくと成長していくことであろう。

ひときれのパンと満足

政治家が積極的に移民問題に取り組んでいることは、人種差別の新たな地平が展開されているということなのだ。これは移民居住者に対してだけでなく、他の分野にある人間にも適用されている。多くがこの問題を重要と捉えている。

ここで容易に明らかとなってくるのは、違法滞在者の

問題と巨大な社会問題の間に横たわる関係、つまり失業問題である。問題は「仕事が不足している」とか、政治家が我々に信じこませようとしているような「政府の労働政策が正しくなかった」ということではないのだ。失業は「失業者によってもたらされる国家の災厄だ」などとマジメに語られている。

さらなるデマ情報がメディアでタレ流される。「X％の人間が法を欺いている。40％が、いや75％でしょう…ついには 135％もの人間が法を欺き、社会保険を不当に受けとっています」と日常的に耳にするようになるだろう。ロビン・リンスホーテンのような政治家は、これらの地区に住む者に対する公的福祉補助費を削減し、失業者らはつねに監視下におかねばならないと公言しているのだ。そして「まずWAO（福祉保険制度）の受給者はその義務を負わねばならない。」としている。

10年前の産業構造変革期には、社会のあらゆる部門で労働者階級はWAOの受給者とならざるをえなかった。10年後、社会福祉財源をカットするため、失業者は「利益を貪る不法受給者」としてキャンペーンが張られていった。現在、この「労働倫理」の図式は、そのまま「違法滞在者」に当てはまろう。財源カット政策のもとに、彼らは社会の「害悪」として貶まれ、不満の対象として描かれている。「失業保険」の概念などは神話であるとして、いまやその存在自体がはばかられる風潮が支配している。福祉政策、福祉国家、社会保険などがつくられた状況は、資本主義の膨張と直接的に関連している。資本にとってこれらは、いかに福祉であれど、取り戻すことのできる利益としてあったのだ。

現在進行しつつある経済建て直し、そしてその行き着く先にあるものは、新たな利益と拡大、つまり生産、労働問題、激しい競争に深くリンクし、切り離して考えることは到底できない。ホッホーベンス社、フォッカー社、ＤＡＦ、フィリップス社、ＫＬＭオランダ航空などで起こっている大量解雇と続発する労働争議は、この結果としてあるのだ。失業率は毎月すさまじい勢いで上昇している。限りなき繁栄と成長の約束されていた時期に確立された社会保険制度（たいした完成度のあるものとも思えないが…）は、今の時代には不適格でありそれが足かせとなっている。失業者にはどんどんと抑圧が加えられ、「一時的な労働力」という概念のなか、再教育の強制を日常的な義務として課せられている。完全雇用を掲げる政策は、資本主義においてはまったくもって不可能なことなのである。無意味に「もっと多くの職を」という要求を生み出すものでしかない。そしてこの職を通じてもたらされるものとは一体どんなものなのか？汚染された製品？無意味な製品？過剰なサービス業？

労働と生産の概念の人間的解釈についての基本的議論、労働の社会的価値に関する議論、経済／社会モデルの基本原理に関する議論などは、支配権力に流れる莫大な利益の中ではほとんど見いだすことなどできないであろう。「もっと多くの職」は創出され、逆に社会保険は最小限かつ容易に取得できないシステムとなっていった。

このような労働倫理システム下で、法を容赦なく適用

するための支配体制が登場してきたのだ。数十年にわたる「福祉国家」政策の下でも下層階級は存在してきた。だが今やこういった時代にも終わりが告げられようとしている。監獄の独房か、あるいは防水段ボールでできたような安っぽい住居に住まわされるかのどちらかを選択しなければならない。これが近い将来に予想される「福祉国家」の姿なのである。再教育キャンプに送られ、パン切れを口にしながらエコ・ブリンクマン気取りの兵士に囲まれて人生を終わらせていくという姿も見えてくることだろう。政治家は自分たちの政治環境をつくりかえようとは言ってはいない。だが、そんなことなど関係ないのだ。

友人の誕生日のパーティーにでも招かれたとしよう。君はその席で自己紹介する時、「失業者です。」とつけ加えるのに屈辱を感じることだろう。社会問題のすべては失業者のせいだと言わんばかりの皆の眼差しが、君に向けられる。このようにして温存される意識が、権力の冷酷かつ直接的な搾取構造に組み入れられ、支配の手段として貫徹されている。

権利の排除、制限、権利への脅迫は、この「神に見放された国」をつくる要素としては充分であるし、ルベルス（現オランダ首相）の言葉をかりれば、「健全なる国家」となるのである。低所得者、移民やいわゆる労働を拒否する人々、これらの人々は皆、社会のあらゆる部門で未来永劫にわたって選別、排除され、労働を拒否する人々にいたっては、受け入れる場所すら用意されてはいないのだ。

「他より優位に立つためだけのものとしての、いわゆる『労働』という言葉は近代の幻想、欺瞞以外のなにものでもない。社会的地位、生活の向上のための行為、それに経済的法報酬のともなう行為と説明すべきだろう。』
——————　J．K　ガルブレイス

これは資本の論理を的確に表現している。世界的な富を生産するシステムとは、同時に貧困と悲劇をも生み出し、そのレベルは加速度的に高くなりつつある。

反動的なノイローゼ

現在我々の目の前で起こっているヨーロッパ統合へ向けた大きな「跳躍」は、その宣言問題をめぐる議論からもわかるように、愚かな試みであるというのはハッキリとしている。ビネンホフ（オランダ議会）の大ホラ吹きどもは、論戦相手をカテゴリーにあてはめて定義づけ勝利をおさめんと躍起になっている。宣言を政策として合法化するためのイデオロギーが模索されているというが、政治／経済エリートども以外に誰が一体こんなものを待ち望んでいるというのか。

ヨーロッパの到りつくゴールと、具体的な変革の中から導かれる発展的関係は、現在政治的諸環境をつくりだしている多くの固有メカニズムに影響されたものである。「はびこる不正が社会を滅ぼさんとしている」 — ヴィム・コック（CDA／キリスト教民主党首）は怒りながらこう語った。彼は自分の能力に疑いの声を投げかける者には感情的な対応をみせることで知られる人物だ。

アムステルダム・スキポール空港で「強制送還」を待つ、「違法滞在者」や亡命申請を却下された難民。

これは周辺諸国と同様、財政カット合法化のためにオランダ国家の目標の一つとして設定された。現在政府が社会変革と呼び、押し進めんとしている「道徳腐敗へのたたかい」も同様である。ここで言われる「社会変革」とは決してポジティブな意味の用語ではない。これはさらなる管理支配をもたらすためのイデオロギーをカムフラージュしておくための言葉である。政治家はこの「社会変革」というのを「不正義に対する闘争」として押し出そうとしているが、このスローガンのもと国家権力を強化させる口実として、いわゆる「犯罪の体制内制度化」がおこなわれているのが実態だ。ささいな窃盗行為で、即、監獄行き、強制労働、肉体的処罰が加えられ、またこれが「警官の増員、権力強化」の理由とされている。これとまったく同じことが難民／亡命申請者、移民などへの処遇にも見てとれることだろう。彼らはオランダ文化の破壊者、国内にいる「敵」として定義づけられているのだ。これらすべてが全ヨーロッパレベルで大陸への流入阻止正当化の口実として用いられている。

この大プロパガンダのルールは、同時に国家政策を遂行し、これを定着させるうえでも用いられた。コトあるごとにこの問題がとりあげられ、不快なまでに繰り返し語られる。コストは醜悪なオランダ政府の政策を体現したような人間である。

90年代のヨーロッパは、反動勢力の手中にある。苦悩とイデオロギーとのギャップのなかで、60年代以来、左翼が獲得し、勝ち得てきたものを潰さんとすることが企てられてきた。価値感と基準の変化の中で、また法と義務の調和の中で極右勢力の台頭を背景として、はたまた大政党によるマイノリティーに関する議論を通じて、イデオロギーはあいまいな表現へと変質していった。

この数年来、社会的貧困と経済的貧困のコンビネーシ

ョンと、その中から生け贄をつくり出す一連のプロセスのなかでネオ・リベラルとしての政治が黒シャツ（ファシストの呼称）をまとった怪物として登場してきた。

各政党は一様にこれら極右勢力の登場を批判し、一般大衆から尊敬の眼差しを浴びる一方、実際には同時に自らが右傾化へのステップを踏み出しはじめていた。政治的混乱をつくりだしつつ「傷口を切開して、タブーをなくそう」などと宣言しているのだ。政治的からみあいをときほぐす、その方向性はまっすぐ「右」に向いている。

民衆が「違法滞在者」についてことさら騒ぎ立てるのは、人種排外のぬかるみに知らず知らずのうちに一歩踏み入れてしまうことである。政府によって造られた「富を奪わんとしているのは誰だ！」という議論についても同じことが言えよう。その先には支配と弾圧が待ち受けている。権利と義務について騒ぎたてることは、社会システムの内的崩壊、不安定化であり、民衆を低賃金労働に落とし込めておくこと以外になにものをももたらさない。これは反動のノイローゼとなって政治の場に公然と登場することとなった。正体をハッキリと見破るのにはパーフェクトにものごとを聞き分ける能力が要求されよう。

ペーター・ステュイベサントの世界

オランダでは「ムラ社会意識」が今も人々の心のうちにある。その原因と打開に関する議論は、未だもってなされたことはない。国際的、民際的な関係の構築などの議論は、入り込む隙間さえない。西側世界の特権秩序防衛のための守護者として機能している「世界主義者」のデマがデッチ上げられている。過去の体制から「新世界秩序」へと移行する期間も、実際その支配体制は維持されたまま、以前同様、南半球の国々に対しては経済戦争が仕向けられている。つまり西側諸国や、その企業が自らの「戦略」遂行を容易にせんがためになされたものであると言えよう。世界銀行、IMF（国際通貨基金）、その他の勢力を大量動員しつつ、資本はむしろ今までよりも速いペースで世界支配を貫徹せんとしている。そこには支配あるのみであり、議論や選択の余地などないのだ。そこでは国家や人間は「ヒューマニズム」の名のもと、酷使され、挙げ句には使い古されたボロぞうきんのごとくゴミ箱行きとなるのだ。労働の国際化は「第三世界」の破滅をもたらした。農業の資本化は何千万もの人民を、地方から大都市のスラムへと追い込んだのだ。過剰な農地化、モノ・カルチャーの強制は計り知れない自然環境の破壊をもたらした。エチオピア、ソマリアの飢餓、サハラの砂漠化はまさにこの結果としてあるのだ。「これらの国が唯一生産し、輸出できるもの、それは難民である。」というのは皮肉だろうか。西側にとって、この「輸出品」は必要とはされていない。

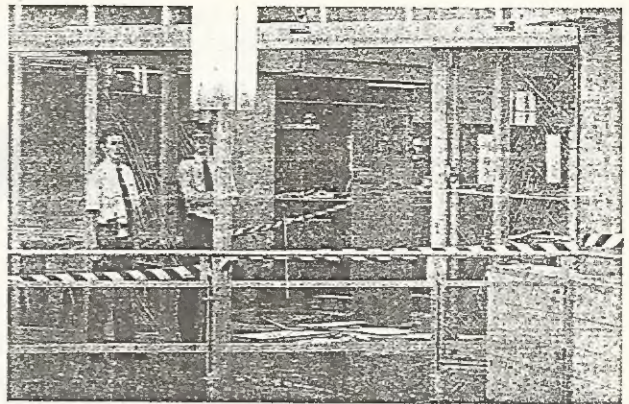
第三世界の抱える債務は1兆3500億ドルとも言われている。年間 550億ドルが「開発援助」として送られてはいるが、繰り越し債務の利子としては、年間約1540億が上乗せさせられている。全世界で 800万もの人々が飢餓、悲惨、貧困、絶望、迫害、（性）暴力に直面し、苦しんでいる。実際の苦しみは計り知れない。 800万という数はあまりにも抽象的すぎるだろう。苦しみが第三世界内で循環している限りは問題ではないだろう。しかしこの苦しみがヨーロッパのノドもとまでやって来たなら、いかなる事態となろうか。

「原因と結果」に関する議論の次に出てくる、「南の荒廃した状況と西側世界の責任問題」に関する議論では「これら暴利をむさぼる輩」をいかに外にださず、完全に封じ込めておくか、といった議論が展開されるのだ。そして議論の結果出てきた回答とは、自分たちのおこないにいっそう「居直る」ということ以外にはないであろう。結局のところ「開発援助」と「国連軍のブルー・ヘルメット部隊」が送りこまれるのみである。それ以外になにがなされるというのか？　皆無である！西欧（新）植民地主義の歴史と、現在の難民、移民問題の関連性の

「違法滞在者、難民狩り」をおこなう法務大臣アード・コスト（写真）や保守政治家を糾弾するポスター

概念は、右翼／左翼の議論として衝突することとなった。
移民、人種差別撤廃、難民などの言葉を語る時、人々はこれら言葉の負っている歴史的背景などすっかり忘れてしまっていることだろう。
人種差別と白人優位主義イデオロギーは、今も西洋文化を構成する基本要素である。ヨーロッパ中心主義に基づく世界観は、右翼のみならず左翼にも浸透している。イデオロギー、歴史、ポスト・モダニズム、ポスト唯物論、いやいやポスト・ナントカ主義… これらすべてが終焉を迎えている。これらはすべて哲学であり、マインド・ゲームであり、非常に限られた世界の一部分にしかすぎない。
混乱する情況にあって、「外からやって来た者」は、いかなるふるまいをせねばならないのか。ステュイベサントが恰好の例である。西側に来る難民は、すべて例外なく「疑いの対象」なのである。丁寧なふるまい、媚びへつらいをし、ボルケンステインを拝聴する人間になれば、ようやく受け入れてもらえるかも知れない。そのボルケンステインがリベラルの旗手としてもてはやされている。「人種差別」はあらゆる社会機関、部門の難民政策の指針であるといえよう。いや、これは問題を政治的に限定しすぎているかも知れない。政治政策が滑稽かつ退屈なもの等として感じられる中、努力すればするほど矛盾が生じてくる。

無人地帯

政治的リーダーシップの危機が戦闘的左翼運動にとって有利な情況をもたらしうるかと言えば、我々が分析する限り、そんなことはないだろう。もちろん社会的コンセンサスの基盤のほころび、裂け目がところどころに見られるのは事実だ。だが現在のところ「リベラル・デモクラシー」に疑問を抱き、文化的にも、政治的にもレジスタンスとして反権力闘争を充分におこなえるだけの潜在性があるとは思えない。政治ショーの配役は決まっており、「無人地帯」で台本どおりに進行していく。
ヨーロッパ統合はダイナミックに開始されたのだが、経営の危機も他方、認識されており、必ずしもハッピーエンドの結末が用意されてはいない。「冷戦」の重荷はもう存在しない。現在自分の暮らす社会こそが最良のものだ、ということを疑う者などいない。だがヨーロッパ統合プロジェクトという歴史的任務を達成できないかもという恐れから彼らは荒野のなかで「迷子」となったのだ。「ヨーロッパ統合の夢」が実現しようとしなかろうと、問題とはならないだろう。重要なのは、さらなる競争、略奪、汚染、破壊の手段に終わりをつげることである。これら社会の根幹となっている要素は、くい止められねばならない。右翼のパラダイスはもはや必要ないのだ。断じてこれ以上拡大させてはならない。
すでに政治化した人々、完成された社会は、今やもう安っぽいイメージで描かれる「敵」には飽き飽きしている。不満が政治ショーの役者、それ自身に向けられない限り、すべては問題ないのだ。左翼も同じ「無人地帯」という場で活動している。だが左翼が何か別なものを提

労働監督局爆破現場を検証するハーグ市警鑑識

起することなど不可能であろう。ほとんどの人々にはそれなりの意志があったはずだが、右翼の「巻き返し」のなかで、一体なにが進行中なのかを正確に分析する時間も神経も持ち合わす余裕はなくなっていった。
現在ではマジメな人権運動活動家でさえ政治的ラディカル派とされてしまっている。ラディカルさを維持し、永続性を高め、非妥協の抵抗闘争を現出させていくことが必要である。我々は誰もが了解する手段をもって権力の政治フィールドを突破したいのだ。これはたんにラディカルな「反対派」の表現行為としてだけの意味をもっているのではない。
ベイルメールにボーイング・ジェット機が墜落した時遺体確認作業にあたる役人らがとった一度だけの例外措置など愚行である。※①
この国を支配するすべての欺瞞に反撃していくことも忘れてはならない。議会が承認しようとしている「反人種差別法」には、次のようにうたわれている。
『民主社会の基本を構成するすべての人々、そして社会を担いオランダに暮らすすべての人々に敬意を込め、私たちはあらゆる差別とたたかい、私たち自身がその手本となるべく、日々おしまずこの目的達成のために努力することをここに宣言する。』
さて、実際には何がおこなわれているのか。
これら美しい言葉で飾られた宣言とは、まったく逆のことがおこなわれているではないか。
「外国人と仲良く！憎しみあいはやめよう！」とデモでスローガンを叫んでいる人物とは、人種差別政策を担っている政治家なのである。これら「差別にたちむかう勇敢な人々」が、国境を越えて逃げ延びて来た人々を、蹴り倒しているのだ。「リベラル・デモクラシー」の時代と呼ばれるポスト冷戦構造の情況にあって、矛盾の根本を正確に見極めていくことは、戦略をうちたてる上で重要である。こういった政治状況を突破する試みには、拍手喝采が浴びせられるわけではないし、花束で迎えられることもない。
1991年11月、オランダを衝撃波が駆け抜けた。※②
マスコミにたたかれるのを恐れた者たちは、即座にこの戦闘と一定の距離をおいた。各団体、組織などは我々の戦闘に対し、パブロフの犬のような反応をとり、個々人ですら沈黙を決め込んでいた。あたかもコストが爆破

アムステルダム郊外に新設された「難民、亡命申請者収容施設」への抗議行動をする難民支援グループ

攻撃で死亡したかのように。この多くは政治的影響力を行使しうる政治フィールド（そのレベルは知れているが…）から放逐されるのを恐れていた。ここで恐ろしいのは、人々が本音を語る場が一切なかったということである。

「多くの人々は爆弾闘争など望んでいないし、そのような手段は今、無意味だ」などと左翼さえもが語っていた。難民政策が明確となり、構造的暴力が目に見える形で増加した時、若干彼らの見解も修正されるだろう。

「信頼される民主主義」が今や時代に迎えられつつある、と言われている。民族政策のゲームが全ヨーロッパレベルで貫徹される状況で、彼らの言う政治的影響力をどこでだせるというのであろうか。

内閣が保革共同路線をとっていることは、何の驚きにもならない。この路線はオランダにとってしっかりと維持されねばならないのだろう。首相ルベルスは雇用者協会に対し、ある要請をおこなった。現状を維持し、労働者のストライキについてはこれを容認するように、と。これが失業保険として支出される予算を抑制させるのが目的なのは明らかだ。これを通じてオランダはいかに保守反動勢力によって支配されているかという具体的な姿が見えてこよう。

デモ隊は街頭で機動隊の警棒にもてあそばれている。5月8日、ハーグのデモ※③では多くの学生、青年が初めてのデモを経験したようである。

彼らは機動隊の暴力に屈し、すなおに家に帰ってしまった。自らの権利のためにたたかうことは、今も許されてはいないのだ。牙をむく機動隊の阻止線の前に、運動が押しつぶされたというのは、決して初めてのことではない。我々の戦闘性は、過去のこれらの経験に由来しているのだ。我々にとってこの「戦闘性」は、闘う手段としての一つの方法にしかすぎない。これは固く閉ざされたサビついたドア、すなわち政治的可能性を切り開くための扉をこじ開けていくことにつながっていく。政治的、文化的領域から反権力運動を勝ちとるために闘うことは、闘い自体に深化をもたらす。これこそが真の反権力闘争として成長しうるのだ。この諸関係にあって、内側奥深くへと突き進んでいくことに、「即一成功」という結果は得られないとしても、見過ごしてはならないことである。だから91年11月の戦闘が、コストを辞任に追い込むとか、「違法滞在者」を収容所に送り続けるコストの悪行を断罪するというのとは別の問題である。ただし我々は「違法滞在者」を我々の側に従属させていくことなど望んではいない。80年代初期にみられるような抵抗闘争の新たな動きとは、現実的なものではなかった。抵抗闘争を呼びかけ、創出し、大衆を即座に動員していくことなど容易なことではない。反権力運動を担いたい、と自分では望んでいても、自分が真に担えるかといえば、簡単にはコトはすすまないのだ。

支配システムが凌辱と破壊の長き歴史に新たな一歩を踏みださんとしている今、抵抗運動が「自発的」に創出されることなどない。我々が目指すのは、誰もが無視できないような方法をもって運動を定義できるような政治的な自己真実の追求と政治議論と行動の境界を探り出すことである。これら責任性などの問題を、政治日程に上げ、明確にしていかねばならない。

無情かつ冷酷な国家政策にハッキリと線引きをし、位置づけ作業をおこなわなければならない。攻撃さるべき議会の席で、今まさに可決されんとしている政策についてである。

彼らの闘い、そして我々の闘い…

我々の立場は国際主義の立場にたったものである。国際主義をとらない左翼の展望など存在しない。国際主義は一つの歴史的真実であった。ラテン・アメリカ、ベトナム、南アフリカの解放闘争は多くの人民を刺激するものだった。そしてこの闘いは西側による南半球の国々への搾取システムと抑圧意識を鮮明にさせるものであったはずだ。しかし今もって左翼は70年代〜80年代の闘争をひきずったままの闘いしかできていない。解放運動と闘争は、その性格を変えた。南米に吹き荒れたサンディニスタ革命の嵐、70年代後半〜80年代前半にみられた革命への息吹はサンディニスタ勢力が選挙で敗北するなか、消滅していった。戦争と飢えのなか、ニカラグアの革命のプロセスは困難に直面していった。今、ふたたび勝利をおさめた帝国主義に対する新たな闘争と、その戦略をどううちたてていかねばならないのか。この問いかけが運動に突きつけられていた。

数十年にわたる過酷かつ流血をみた解放闘争のなかでゲリラとして闘っていた勢力が、交渉テーブルの席についたり、いままでとはちがった立場をとろうとしている者もいる。ゲリラ勢力は合法組織へと変質し、議会主義に到りついたところもある。他方、スラムでの闘い、反基地闘争、日常を変革していこうとする闘いも存在している。「民主化」によって生み出された相対的な政治空間のなかで登場してきた大衆組織は、強固な運動へと成長していった。

これら一連の情況はヨーロッパの左翼に混乱をもたらすこととなった。革命的変革への希望はたちどころに消滅し、同様にそれへの関心すら死に絶えることとなった。連帯運動は分裂をみるか、自己解体するという結末を遂げた。もう何もおこなう必要などなくなってしまったからだ。

マンデラ氏は今や自由の身である。ANCとデ・クラーク（南アフリカ大統領）は「対話の時代」の象徴とされている。左翼が国際主義闘争、あるいは反帝闘争を展望、指向していく上で、これは「弱み」となっていた。

世界各地で闘われていた魅力的な闘争に左翼は頼ってきた。帝国主義が「返り咲いた」ことに影響はない、と言われている。闘争が全般的に連帯運動として、かの地の情況にのみ終始していたため、こちらの闘争とリンクさせ関連づけていくという意識に欠けていた。南アフリカ、エルサルバドル、ニカラグアなどへの連帯闘争の崩壊が意味するものは大きい。もちろん「支援」は以前同様、必要とされている。変革へ向けて闘うための連帯の形態として「支援」は必要であろう。ヨーロッパの左翼は明らかに「ひとりよがり」であったと言えよう。自分たちの社会に、自分たちの内部にこそ、その問題の根源を今こそ見つけださねばならないのだ。歴史、文化、伝統、自分たちの経験を再度検証せねばならない。　西欧社会の根源的変革へ向けて闘うことは、「第三世界」の民族自決権問題へとつながっていくだけでなく、生活環境、自由、この地での自己決定の問題にかかわることでもあるのだ。

ブロッカー社での「違法滞在者摘発」には、DIA職員の他、機動隊、警察犬が動員された。

言いかえれば「彼らの闘いは、我々の闘いでもあるのだ。これこそが国際連帯闘争なのである。」

つまり関係性を結ぶ意識のことである。原因と影響は再び正しい順序で並びかえられねばならない。ヨーロッパは隷属、虐殺、植民地主義を土台に形成されてきた。我々の暮らすこの「富のシステム」は何世紀にもわたる抑圧と搾取の結果としてある。我々の、いわゆる「多国籍文化／混合文化」と呼ばれる社会は、過去の植民地主義、そして現在のネオ植民地主義者らの産物なのだ。

移民や亡命申請者、人種排外主義者の侵略、暴力、そして違法滞在者にたいする悪辣なキャンペーンは日々増幅の一途をたどっている。この結果として難民をくい止めるために、国境の壁はさらに高く築かれることとなるのだ。

大多数が貧困に追い込まれている一方、ひとにぎりの者が利益に与かっている。さらなる人民が資本主義の発展のいけにえとして、次々と犠牲にされていく。根源的変革も必要だが、それ以上に勝ちとらねばならないものがあるのだ。

変革の余地

我々は労働監督局／DIA事務所のあるフロアに侵入した。労働監督局とは、「違法滞在者」狩りをおこなう先兵の役割を担う行政部局である。ブロッカー（オランダ全土にチェーン店をもつ中型デパート）に対しおこなった「違法滞在労働者大量摘発」は、一つの例を提示している。この摘発には警察犬、ヘリコプター、フル装備の警官 120名が投入されブロッカー配送センター、倉庫で働く労働者を、肌の色が違うというだけで「疑わしき人物」としていったのである。「クヴァルチェと言ってみろ！」と強要し、言葉のアクセントでオランダ人かどうかを見分けようとしていたのだ。もし少しでもおかしな発音をした者は、そのまま即時拘束されていった。そして手にスタンプを押され、市役所内に移送された。この一連の摘発をCDAの政治家どもは、「身分証を所持していなかったのだからしょうがない。」などと言ってのけている。摘発にあたる警察のワゴン車が今日もまた違法滞在者狩りのために町中を駆け回っている。

労働監督局は「違法滞在者がオランダにいる限り、失業問題は解決されない」とする政府方針のもと、違法滞

在者摘発機関として1978年創設された。最近になってこの部局には2倍の人員が配置され、予算も倍額が与えられることとなった。これはいったい何を意味するのか。さらなる人間狩り、そこから生まれる犠牲者、貧困、恐怖の再生産以外のなにものでもない。そしてこの部局が社会内務労働省内におかれていることは、政府が違法滞在者や難民を「オランダ社会に悪影響を及ぼす者」と敵視している証拠であろう。

人間が目の前で抹殺されんとしているのに、これらを傍観していることなどとうていできはしない。こうしている間にも人種排外主義は勢力を拡大させて社会的マジョリティーを形成しつつある。

人間狩りをする労働監督局に大して、標的として狙われ、汚名をきせられる者の苦汁を具体的なカタチで味あわせてやらねばならなかった。標的とされるということがどういう気持ちなのか、少しはわかったハズだ。

多くの犠牲者が、この部局の役人どもによって生み出されてきた。だが実行者の名前は公表されていない。こういった政策、政治文化に対し、我々は闘いを宣言する。亡命申請者、難民受入れ政策に対する闘いとは、すなわち人間的社会へ向けた闘いであるのだ。

すべての人間に未来が与えられる社会をこそ獲得せん！

つねに摘発の恐怖に脅え、毎夜ビクビクして過ごさねばならない日々を強制する社会を認めはしない。

我々はゴールへむけ、具体的行動、構造の構築、展望の交換、検証作業を通じて変革のための空間を創出せねばならない。

このプロセスなしに我々の行動はありえない。

では次の機会まで。

Revolutionaire Anti Racistische Actie
（革命的反人種差別行動）
1993年7月

「難民収容施設」は4メートルのフェンスで囲まれており、24時間の監視体制が敷かれている。

▷訳註

※①　違法滞在者が多く居住するアムステルダム郊外ベイルメールの高層アパートにイスラエル航空貨物機が墜落、直撃した事件（92年）で、数百人にもおよぶ犠牲者総数把握のため政府は「特別措置」として、違法滞在者でも行方不明者捜索申請をおこなうことができ、これに関してのみ「違法滞在」としては摘発しない、と発表した。

※②　難民政策を担当する法務大臣アード・コストの住居に対し、ＲＡＲＡが爆破攻撃を敢行。建物の半分が吹き飛んだ。

※③　今年5月8日、教育補助廃止法案と鉄道学割制度廃止法案の粉砕をかかげて、オランダ全土から1万人の学生、青年が首都ハーグに結集し議会議事堂へ向けてデモ行進しようとした。警察当局は機動隊、騎馬警官隊を大量投入し、デモを徹底弾圧した。

（1ページからつづく）

法滞在者が本国へ強制送還されていた。ＣＤＡ（連立与党／キリスト教民主）は「これら送還に際し機内での混乱を避けるために、抵抗する難民には神経性催涙ガスを使用している」と公言している。

こうした情況のなかＲＡＲＡは強制送還攻撃を加える法務省と法務大臣アード・コストに対する連続爆破戦闘を敢行（'91年11月12〜13日）し、人種差別政策、排外主義攻撃と断固対決することを表明した。法務大臣アード・コスト私邸への爆破攻撃では、建物の半分をコナゴナに吹き飛ばすダメージを与えている。だがこれに対し左翼各政党、団体はマスコミの「左翼＝テロリスト」キャンペーンから逃れるために、「爆弾闘争は難民や違法滞在者の立場をよけいに悪化させるだけ」としてＲＡＲＡを早々に非難した。

今回の爆破戦闘は「違法滞在労働者」を「最前線」で取り締まる社会内務労働省／労働監督局に対するものであった。爆破戦闘当日6月30日、午前2時頃から爆破予告が数度にわたって地元警察になされていた。（警察、消防当局は「予告にもとづき捜索したが何も発見できなかった」と発表している。）午前3時半すぎ、労働監督局のある4階フロアのトイレで爆弾が炸裂しフロア全体が大破した。負傷者はなかった。直接的ダメージは4階フロアのみだったが、作動したスプリンクラーで建物内が水びたしとなり、全館にわたって事務機能が数日間マヒ状態となった。メディアは早速「ＲＡＲＡ＝凶悪テロリスト集団」キャンペーンを張り、ＢＶＤ（オランダ国家情報部）、ＣＲＩ（治安捜査局）によるデマ情報がそのままタレ流された。保守系新聞「テレグラーフ」紙は「ＲＡＲＡの実態」として事件とは何の関係もない左翼グループ各メンバー個々人の名をあげながら「反テロ特集」記事を組んだ。

声明は爆破翌日マスコミに送付されたものと、翌々日に左翼団体、グループに向けたもの、計2通発表されている。今回掲載したのは左翼に向けて発表された声明であり、オランダ／ヨーロッパにおける人種差別問題とその闘いから逃亡してきた左翼への批判、革命的左翼運動への視点といったものが読みとれよう。　（編集部）

RAF(ドイツ赤軍派)

7.6 声明

ヴォルフガング・グラムス→

我々は断じてこれを容認しない!

BAW(連邦捜査局)、BKA(連邦刑事局)、VS(連邦憲法擁護庁)は、その殺戮部隊GSG9－MEKをもってビルギット・ホーゲフェルトの逮捕、ヴォルフガング・グラムスの虐殺という残忍極まりない、一連の「テロ攻撃」をおこなった。我々は、これに沈黙していることはできない。

我々は1992年4月、「戦いのエスカレート」の一方的停止宣言をおこなったが、国家治安当局がこれを受け入れ、我々への攻撃を停止するなどとは当然思ってはいなかった。実際、獄中にある我々の同志らに対して加えられた国家からのテロ攻撃に見るように、権力側から逆にエスカレート攻撃が加えられたと言えるだろう。

グラムスが射殺されたバート・クライネン駅4番線ホーム。現場からは多くの銃弾が発見された。

今もってこのような冷酷かつ残忍な現実に直面させられることは、我々にとって大きな衝撃である。ヴォルフガングが今もまだどこかで生きているかもしれぬと思い馳せながらも、この事件が当局内部において正当化され、上層部による湮滅工作がなされるのは確実である。我々のこの怒りあふれる感情を抑えることは容易なことではない。権力は共に暮らしていた男女2人の同志を、暴力をもって引き裂いたのである。

今までとは別の視点から捉え返しつつ、継続して認識作業をおこなってきたが、それには我々自身未だ回答を出しきれてはいないとあらためて確認し、我々の過去を克服せんとつとめてきた共同の努力による、とりわけこの2年間というものが思い起こされる。この進行中のプロセスにあって、時には苦痛をもって臨まねばならないすべての人々からの批判、あるいは自己批判作業からの逃亡、これらに臨む勇気が要求されることとなった。

これは我々にとって我々自らの歴史を再考し、その多くの良い点、または同様に多くの誤っていた点などについて確認するのは非常に重要なことであった。これが意味したこととは、すなわち我々自身の経験を正真正銘の現実のものへと高めることであったのだ。議論が全般に我々の未来に向け進展しているという事実から、若干の展望が見えるものとなってきた。未来とは新たなものを発見せんとする意志、以前とは異なった状況に立ち向かう知識、そこから自らの可能性を探り出していくこと、あるいは他の闘争の経験に学び、下からの反権力闘争構築の過程で我々自身の基準を設定し、有効に活用していくあらゆる面からの必要性にせまられたものである。

ヴォルフガングは死んだ。虐殺されたのだ。我々は深い悲しみと最大の慈愛をこめて、追悼の言葉を送ろう。

議論をおこなう上で要求されるのは、安易な決断をせず、ものごとを再度忍耐をもって確認するという几帳面な態度であり、これは決して容易なことではなかった。

－例えば単に、他人とは別の視点に立て、などと言うばかりでなく情況を見とおし、提起をおこない確認作業をするということが認識されねばならない。彼は常にこの立場に立つ人物であった。これこそもまた我々が彼を惜しむ理由である。

抑圧からの解放への闘争に身をおき闘った彼は、我々の心の中で永遠の同志として生き続けることであろう。

1992年4月10日、我々は国家に対する我々の側からの

対テロ特殊部隊、ＧＳＧ９の訓練風景

戦いのエスカレートを休止した。国家や資本の代表機関に対する一連の攻撃を停止した。これは我々自身のためであったと言えよう。我々は我々の政治方針、あるいは左翼全体の政治的展望の再定義づけへ向けた決定的な一歩を踏み出したかったのだ。対決のエスカレートに代わる政治的討論はなんとしてでも必要であった。

我々は、我々の22年間にわたる戦いを一時休止した。そして政治囚として囚われている仲間の解放へ向けた闘いは、この局面で切り開かれねばならないと判断するに至った。この立場に対し、今もって国家はあらゆる反対勢力への抹殺攻撃を加えてきており、これは一層明確化している。我々は国家に政治的決断を突きつけた。しかし未だ国家や資本のエリートどもは、この準備すらしていない。同様のことが何度となく繰り返されてきたのだ。このきわめて重要な政治的決断は、司法当局、警察、軍によって退けられ、それに代わっては彼らなりの回答が用意されていたのだ。

国家は我々の戦いの非エスカレート化宣言以降、我々の自己批判作業を見て、我々が内部的に弱体化した証拠として捉えたようである。国家は政治囚への処遇をより劣悪なものとしたのみであり、投獄中の同志らに対しては更になる追起訴攻撃をおこなったのだ。

過去数年のさまざまな運動展開のなかで、そしてとりわけ６月27日の国家によるテロ攻撃によって明らかとなったことは、この国における人権とはいったい何であるのかということである。そして崩壊しつつある資本システム下で、またワールド・パワーとならんともくろむこの国によって、現在この人権が危機にされているのだ。これは日々いっそう激化しつつある。国家概念の下に確立された人権などまったく無意味なものである。 ― そしてまた経済概念の下で確立された人権というものについても同じことが言えよう。

資本主義とは常に人民の屍体を踏みつけてしか前に進めないものなのである。

このシステムは何としてでも打ち倒されねばならない。―我々は我々が1992年４月10日声明以降、もしくはその他の各声明の中で発表してきたように、このプロセスから我々自身の路線というものを明確に見いだすであろう。

しかし現在となっては、スタート地点は別の場所に設定されねばならない。ヴォルフガングは処刑されたのだ。

支配権力は我々の側にある者すべてを抹殺せんとしているのだ。

この国家テロルに怒りを表明する者すべてに対し、我々は呼びかける！この日を断じて認めてはならない！
これを断じて認めてはならないのだ！

ヴォルフガング虐殺劇の第１幕は効果的な舞台装置を活用し、進行した。ペナー（ＳＰＤ／社民党内務政策担当）は次のようなコメントを述べている。

「このようなことは、いつでも起こりうる。」
それだけでは飽きたらず、公安調査活動の不備についての不満も述べたてている。あらゆる真実が黒いベールで覆い隠され、それに代わってデマ、ニセ情報がバラ撒かれた'77年のＳＰＤ与党時代の情況を彷彿させるものである。

残念ながら自らのウソをつきとおすことのできなかった彼らにとって、これはスキャンダラスに報道されてしまったようである。人間狩り攻撃、ヴォルフガング虐殺が明らかとなったことで、彼らの運は尽きたと言えよう。この事件で、内相ザイタースの辞任話が持ち上がった時、次内相候補に上がったのはリパブリカーナー（元ナチ親衛隊ＳＳのシェーンフーバーを党首とする極右ネオナチ政党－訳註）のシンパとして知られた人物であった。ここドイツにおいて事態がいかなる方向へと進みつつあるのか、このことでハッキリと理解できるであろう。

過去の23年間で明らかになったこととは、我々ＲＡＦあるいは反権力闘争を軍事的手段をもってしては封じ込めることなどできはしないということである。

反ヒューマニズムと不正義がこの国を、そして世界を支配する限り、このような事件は再び繰り返されるのだ。

ビルギット、我々は君にもっとも暖かい抱擁を送ろう！

Rote Armee Fraktion
1993 年７月６日

「グラムス射殺」の事実が明るみに出て、内相ルドルフ・ザイダースは辞任に追い込まれた。（７月４日）

ビルギット・ホーゲフェルトの書簡

これはビルギット・ホーゲフェルトがバート・クライネン駅での逮捕直後、拘置所内で記した手紙である。

私は今、もう疲れきっています。なんとも言えない重さが感情を支配し、深い悲しみでいっぱいです。この手紙を書こうと思い筆をとってからどのくらい時間が経ったことでしょうか。数えきれない思いと記憶が私の頭のなかを駆けめぐり、涙がとめどなくあふれ出てきます。

今は火曜日の午前11時。2日前、ヴォルフガングはまだ生きていました。彼が撃たれたのは日曜日、午後3時15分でした。意識の戻らないまま、午後5時10分ごろ、リューベックの病院で死んだと聞かされました。頭を撃ち抜かれたそうです。

ヴォルフガングと私は18、19年前にはじめて出会いました。そして愛しあうようになって11年がたつでしょうか。これほどまで人間として深く接することのできた人は、私の人生のなかで初めてでした。お互いがすべてを理解しあっていました。言葉なんていりませんでした。

昨日、私はＢＧＳ（国境警備隊）のヘリコプターで、ヴィスマールからカールスルーエへと移送されました。とても素晴らしい空が広がっていました。数キロ先まで見渡すことができました。遠くのリューベックの町もはっきりと見てとれました。彼が霊安室の氷の中に横たわっている姿が思い浮かびました。

私の目の前で語りかけてくる彼の顔、その表情の一つ一つ、身振り、声、におい、あらゆる姿が夜となった今もはっきりと思いおこされます。彼の美しいテノールを響かす声で、一緒にブルースを歌ったりしたのを覚えています。私たちがもし、この野蛮な国とは別のところで生まれていたなら、彼はその人生を音楽に見いだすこともできたでしょう。私たちの別れの場となったバート・クライネン駅での光景は、私の心のなかに永遠に刻まれることでしょう。

私は彼よりも先に現場に到着していました。彼がそこへやって来たのは2時ごろです。彼をすぐに見つけることができました。彼は笑顔で大きく手を広げて私の方へと駆け寄ってきました。私たちはしばらくの間、抱きしめあっていました。

ヴォルフガングは射殺、私は逮捕という結末を迎えてしまいました。とくに代わったことなんて少し前には何もなかったのです。ヴィスマールから私がそこに着いたのは、午後1時ごろだったように思います。この時、私はすでに監視下にあったのです。あとで聞かされましたが、タイプライターと数冊の本を入れてあったリュックサックはＢＫＡが押収したそうです。

バート・クライネンは小さな町で、日曜には駅舎内のバーしか他に飲むところはありません。ヴォルフガングに会いに行く少し前、私はそのバーにいました。そして2人でおちあった後、再びバーに戻りました。午後3時すぎ、バーを出たあと私たちは駅の出口のある線路下の地下道をくぐって反対側へ出ようとしていました。数歩ばかり進んだところだったでしょうか。男が1人、私の前に立ちはだかりました。見えたのは、その男がかまえている拳銃でした。私はとっさに地面に伏せました。しかし、2、3人だったか、武器をもった別の男に押さえこまれました。逃げようとすれば、絶対に殺される、と瞬間的に思いました。この時、何人かが駆けていく足音が聞こえました。ヴォルフガングは逃げることができたんだ、と思いましたが見ることはできませんでした。

階段上のプラットホームから銃声が聞こえました。やはり逃げたんだ、と思いました。ヴォルフガングは地下道を20メートル駆け抜け、階段を上っていったそうです。数発の銃音が響きました。その直後、特殊部隊が駆けおりてきて、大声で叫びました。

「奴は血まみれになって4番ホームに倒れたぞ！」

私はこれがヴォルフガングのことだとすぐにわかりました。彼らは銃撃戦がおわったあとも、興奮して落ち着かない様子でした。とにかく興奮していて1人は私に歩み寄ると、いきなり私の頭をつかみあげ、殴りつけたのです。興奮していて、その動作には理性というものが失われていました。

私は後ろ手にきつく縛られていました。今でも手の感覚がなく、腫れ上がって、すりむいたままです。

さるぐつわはテープで何重にも巻かれ、息もできませんでした。ヴィスマールの警察署までは車で連れていかれましたが、さるぐつわは外されませんでした。少し緩められて、やっと息ができるくらいでした。

私が持っていたピストルはとりあげられています。ヴィスマールでは連邦刑事局の人間がすでに待ち受けていたようです。彼らは私の本名を呼びながら話しはじめました。このあと私は1日中ヴォルフガングがどうなったのかを尋ねつづけていたように記憶しています。

グラムスの死体。側頭部には銃弾を撃ち込まれた跡がある。

事件が一大スキャンダルとして報じられる中、連邦検事総長フォンシュタール（写真中央）も辞任。

私は弁護士と母親とに話しがしたいと告げました。私に知らせることなど一切ない、誰とも面会することは許されない、それはＢＡＷの人間が判断して決めることだ、と繰り返されるばかりでした。ＢＡＷの係官がやって来たのは深夜近かったと思います。何度かあいまいな話しが続いたあと、ヴォルフガングが死んだことを聞かされました。それから係官が何か会話でもしようじゃないかと言いだし、自分の赤ちゃんの写真をとりだしたりして話しをしはじめました。私はその場を立ち去ろうと思いました。

午前１時、再び私のいる房にやって来た彼らは、上の階へ上がるように言いました。私はこれを拒否し、休息がとりたい旨告げました。この時電話が許可されたのを聞かされました。母親に電話をかけ、話をすることができました。母は、ヴォルフガングの死や私が逮捕されたことをすでに知っていました。事の一部始終を話さなくてすんだのは助かりました。もし母が事件を知らなくて私が最初から話さなければならなかったなら、私自身耐えきれなかったでしょう。母にとってはきっと私からの電話は「驚き」というよりも「安堵」を与えたことでしょう。私が協力しなければ、ここからは一生でれないのだ、と電話の後、係官が言っていました。その場から去ろうと思い、ドアを開けました。そこにはカメラを構えた何人もの人間が立っていました。私は自分の顔を思いっきりゆがめました。

房に連れ戻されたあと、とにかく横になって休みたかったのですが、午前２時ごろ彼らは再びやってきました。

もう耐えきれませんでした。写真撮影だ、と言いだしいますぐこれに応じないのなら別室へ連れて行って医務官に鎮静剤を射ってもらってムリやりにでも写真を撮ってやると怒鳴っていました。係官らは私の写真を撮りはじめようとしましたが、私は顔を伏せたりして30分は抵抗しました。入れ代わりに何人もの人間がやってきて、交替で何枚もの写真を撮影してました。

結局向こうもあきらめたようで、私は房内へ戻されました。薄暗い房内にはカメラを構えた係官が待機していました。

午前３時半、私はやっと１人になれましたが。しばらくのあいだ涙が止まらず、そして眠りにつきました。

翌日、昼ごろ法務担当官が私の房にやってきました。「我々は少々無謀だったかもしれないということは、こちらもわかっている…。こちらの書類にも書いておいたよ。今のところこちらの記述で特に何か反響があるわけではないようだ…。　ヴァイターシュタット（今年３月ドイツ赤軍によって爆破された拘置所－訳註）もそうだったように…。獄中者は自ら壁をつくっているんだよ。そして結局、その情況を終わらすためのヴィジョンをもとうとしないんだよ…。彼らの願いを受け入れるのが我々の結論だったが…。」彼は口をとじようとはせず、話し続けていました。　私は「一つ聞きたいことがあります。」と彼の言葉をさえぎりました。一瞬の沈黙をおいて私は続けました。

ＢＫＡが私のメガネをとりあげたままで、まだ返してもらってはいない、と。彼はなんだかメガネについて話しはじめたのですが、自分でも愚かしく感じたのか、部屋を出ていってしまいました。

午後、私はヘリコプターでカールスルーエへ移送されました。完全に隔離された独房でした。でもその後、短くはありましたが母と弟との面会が許されました。とてもうれしかったです。

最終的に私はプロイングスハイム監獄へ送られました。監舎に移る時、鉄格子ごしにしきりに手をふり、私の名前を呼ぶ人影がありました。

エヴァ・ハウレ（元ドイツ赤軍派兵士／獄中者）でした。私も短く叫びかえし、手をふってて応えました。

言いたいことはまだ山ほどあります。

でも今日はこのぐらいにしておきます。

―――　ビルギット・ホーゲフェルト

Betreff
Ermittlungsverfahren gegen Birgit HOGEFELD wegen Verdachts der Mitgliedschaft in einer terroristischen Vereinigung
hier: Auswertung der schriftlichen Asservate im Hinblick auf Personenkontakte und Kommunikationsstrukturen sowie Gefährdungserkenntnisse

Die Schreiben belegen, daß die Eltern seit Jahren über Drittpersonen Kontakte zu ihren in die "Illegalität abgetauchten" Kindern, Birgit HOGEFELD und Wolfgang GRAMS unterhielten. Dabei geht aus den Inhalten der Briefe eindeutig hervor, daß die Eltern wußten, daß Birgit HOGEFELD und Wolfgang GRAMS sowohl am Abfassen der "RAF"-Erklärungen von 1992 als auch am Anschlag von Weiterstadt beteiligt waren.

DIE TAGE vor Bad Kleinen: Seite aus dem Terminkalender von Wolfgang Grams mit verschlüsselten Verabredungen (oben). Links Auszug aus BKA-Bericht

連邦刑事局の報告書（左）と、グラムスの手帖（右）

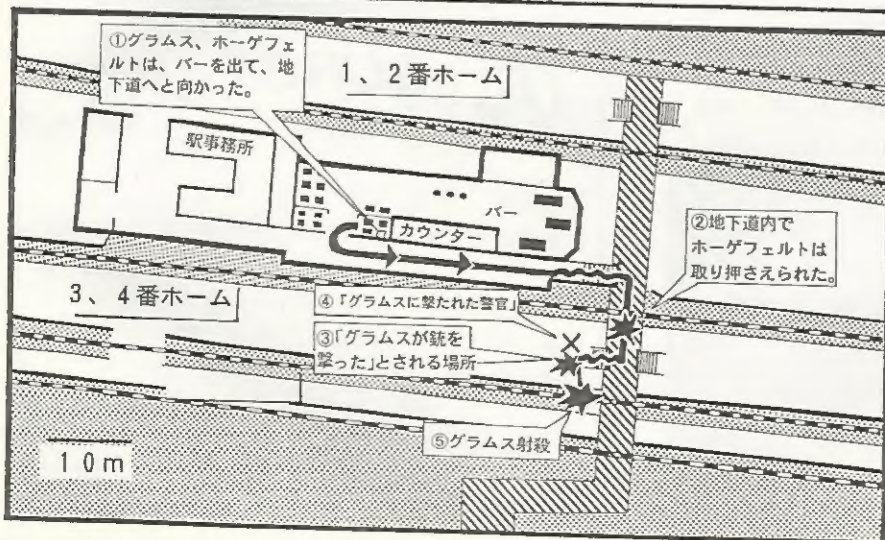
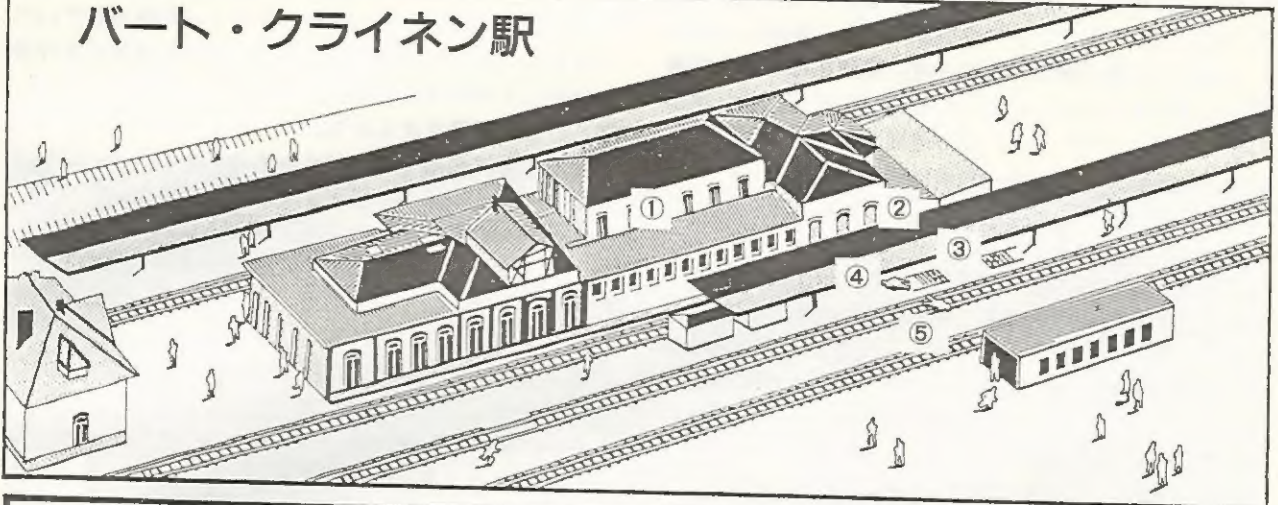
＜解 説＞

6月27日、メクレンブルク・フォアポメルン州のバート・クライネン駅においてドイツ赤軍ＲＡＦメンバー、ヴォルフガング・グラムス(40)、ビルギット・ホーゲフェルト(37)が内務省直轄の対テロ特殊部隊ＧＳＧ９の待ち伏せ攻撃にあい、ホーゲフェルトは逮捕、グラムスは射殺された。当日の状況から、のちに多くの不審な事実が浮かびあがってきた。

射殺を隠蔽した当局

レストラン兼バーから出てきた２人は、駅の反対側へ抜けようとプラットホーム地下構道への階段を下りようとしていたところ、待機していたＧＳＧ９隊員、地元警官隊らによって取り囲まれた。ビルギットは拳銃を突きつけられ、その場で逮捕されたがグラムスはとっさに走りだしてホームへと駆けあがった。部隊はこれに発砲。この時の銃撃で地元警官１名が死亡している。結局グラムスは４番線ホーム上で転倒したところを押さえ込まれた。ＧＳＧ９は彼の頭部に銃を突きつけ射殺した。（下図参照） 連邦刑事局は当初「グラムスは警官隊に向け発砲し１名を射殺したあと、自分で頭部に拳銃をあて自殺」と発表していたが、多くの目撃証言やＧＳＧ９隊員の告白からグラムス射殺の事実や、また死亡した地元警官も味方の銃に撃たれたものであることが明らかとなった。事実が公然となるにつれて問題は一大スキャンダルとしてマスコミで報じられ、この結果、連邦内相ルドルフ・ザイタースが「部隊指揮の誤りがあった」として首相コールに辞表を提出、受理された。（７月４日） 追って連邦検事総長フォン・シュタールも辞任している。

連邦捜査局側は今回の銃撃射殺事件については今もって「グラムスは自殺の可能性がある」という立場を崩し

ドイツ北部にあるバート・クライネン駅は田舎の小さな駅である。

グラムス、ホーゲフェルトは駅舎内のバー（①）でクラウス・スタインメッツと「待ち合わせ」ていた。午後３時15分すぎ、バーから出てきたグラムス、ホーゲフェルトは地下道へ向かい、待ち伏せていたＧＳＧ９に取り囲まれ（②）ホーゲフェルトはその場で取り押さえられたがグラムスは逃げきりプラットホームへと駆け上がった。このとき「銃弾一発を発射し（③）地元警官に命中」（当局発表）した（④）が転倒したところを取り押さえられ射殺された。（⑤）

ていない。そして「グラムスの所持していた拳銃とＧＳＧ９の使用していた拳銃はいずれも口径９㎜であったため捜査は難航」としている。だが事件後の現場検証もズサンな形でしかなされておらず、偶然現場にいあわせた市民が銃撃戦の模様を撮影したビデオテープ（２種類存在している）も「捜査資料」の名目で押収されたままとなっている。

現場にいた第３の人物

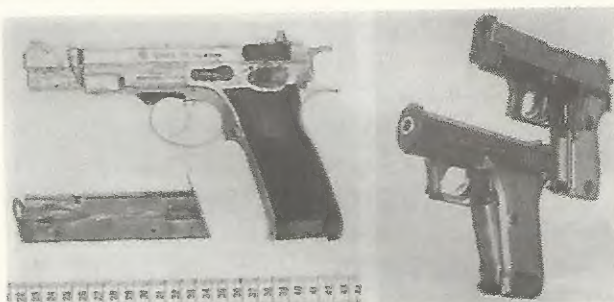
その後、グラムスとホーゲフェルトの「待ち合わせ」には第３の人物、Ｖ－Mann（ファオ・マン）が介在していたことが明らかとなってくる。この人物とはクラウス・スタインメッツという名で80年代半ばからアウトノーメ運動に潜入していたスパイで、ドイツ情報部／憲法擁護庁によって送り込まれた事実が浮かび上がってきた。彼はおもにアウトノーメ運動やＲＡＦの情報収集にあたっていたとされる。グラムスとホーゲフェルトが地下活動を開始する頃からすでに２人とは「信頼関係」を築き上げており、自らも「ＲＡＦ兵士」として潜入していた模様である。

バート・クライネン駅での逮捕にはＧＳＧ９が投入され、数日前から現地に待機していたことなどから２人はこのクラウス・スタインメッツにおびきだされてワナにはまったのではないか、との疑いが強かった。さらに事件当日、ドルトムント、フランクフルト、ゲルカンキルヘン各地で左翼活動家50人が一斉に逮捕されている（当局は「うち９人はテロリストの疑い」と発表）ことなどの事実を含めて考えると一連の逮捕、射殺攻撃は周到に計画されていたものであったのは明らかである。

射殺されたグラムス

ヴォルフガング・グラムスは70年代頃から運動に関わりだし、当初は公然活動家として政治囚の救援、アウトノーメ・反ファシズムＡＮＴＩＦＡ運動やナチ時代に迫・害され強制労働キャンプへ送られた人々の支援組織、ロマ人（＝「ジプシー」）の強制送還抗議ハンスト連帯闘争など多くの闘争現場で精力的に活動していた。活動を通じてビルギット・ホーゲフェルトとめぐりあい、恋愛関係になっていった。そして1984年に２人はドイツ赤軍兵士として地下に潜り、闘争を続けていたようである。

警察当局は２人を「大蔵次官ティートマイヤー（現ドイツ連銀総裁）暗殺未遂容疑」などで指名手配していた。

ヴィースバーデンでのグラムス追悼集会、デモ。（7月10日）当局は大量の機動隊、国境警備隊を配置した。

グラムスの所持していたとされる拳銃（左）と、ＧＳＧ９の使用する拳銃。いずれも口径９㍉のため「グラムスの頭部から摘出された弾丸は、グラムスの銃から発射された」（ＢＫＡ当局）とされている。

虐殺抗議の波

事件当日の夜、グラムス虐殺とホーゲフェルト逮捕に抗議してすぐさま警察署２ヵ所に対する火炎攻撃がなされている。ドイツ各地で追悼抗議集会がもたれ、翌週７月10日にヴィースバーデンで大規模なデモが呼びかけられた。3500人が結集し「国家テロ糾弾とＧＳＧ９の即時解体」を訴えた。マスコミはデモの一週間も前から「テロリストグループが過激なデモを予定し、暴動を企てている」などとデマ情報を流していたこともあり、当日は市内のほとんどの商店は固くシャッターを降ろしていた。

警察当局も厳戒警備体制を敷き、国境警備隊（ＢＧＳ）やババリア州特殊治安部隊（ＵＳＫ）を動員、さらにはＧＳＧ９も待機させていた。

デモ行進に先立って、グラムスの弟が追悼文を読み上げ、ノルウェイ、イタリア、プエルト・リコ、ウルグアイ、カナダのグループからのメッセージが代読されたあと、アウトノーメＡＮＴＩＦＡ運動代表が「虐殺弾劾！政治囚の即時釈放」を叫んだ。グラムスの両親、ホーゲフェルトの母親も行進に加わっている。

後日グラムスの両親は首相コールを「殺人」で連邦裁判所に告発し、賠償請求をおこなっている。

世界の革命運動の情報紙

★発行　Ａ．Ｒ．Ｐ
★連絡先　〒606 京都市左京郵便局私書箱57号 ＡＲＰ
★ＦＡＸ　０７５－７８１－１２５３
★定期購読料　10号分　２５００円
★郵便振替口座
大阪２－２５２９２３　ＡＲＰ

本号 300円